

重度・重複障害児及び重症心身障害児教育における コミュニケーションに関する研究の動向と課題

山根 康代

畿央大学教育学部現代教育学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

Trends and issues in research on communication in education for the children with profound and multiple disabilities and severe mental and physical disabilities

Yasuyo YAMANE

Department of Education, Faculty of Education, Kio University
(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

I はじめに

近年、特別支援教育を受けている子どもたちの障害の重度・重複化及び多様化が進んでおり、文部科学省の調査（2022）によると、多くの特別支援学校には「重複障害学級」が設置され、令和3年度では25.4%の重複障害児が在籍している。医療的ケアを受けている幼児、児童生徒は同年度において特別支援学校は8,485人、幼稚園、小中学校及び高等学校においては1,783人に及んでおり、増加の一途をたどっている。特に通常学校において、医療的ケアを受けている児童生徒の増加は著しい。そして、医療的ケア児が学校教育を受ける機会を確保するための取組も展開されている。

筆者はこれまでの研究において、重症心身障害児（超重症児も含む）及び重度・重複障害児（以後重度・重複障害児とする）の教育的支援の方法等について述べてきた。重度・重複障害児の教育的支援について検討することは喫緊の課題であると考ええる。

また、川住（2018）や細渕（2014）、池田（2015）はその研究の中で、重度・重複障害児が他者との関わりをもつことの重要性について論じている。筆者もコミュニケーション活動が受動的になりがちな重度・重複障害児において、少しでも能動的な表出が生じるように教育的な指導や支援の中で、重度・重複障害児のコミュニケーション活動を展開していくことは大切であると考えている。

細渕（1996）は重症児のコミュニケーションの考え方について、「ことば」を使うコミュニケーションの促進よりも気持ちの共感・共有の関係の形成こそ、重症児のコミュニケーションの初期発達の基盤となっているとまとめている。遠藤（1992）も同様にコミュニケーションの成立には必ずしも言語を必要とはしない

と述べている。これらのことを踏まえても、筆者は重度・重複障害児におけるコミュニケーションの基盤は、他者との関係性に基づく情動的交流における相互的な交渉であると考ええる。そのため、重度・重複障害児に対する支援者や指導者の理解や働きかけが重要なのである。このことについては既に多くの研究者によっても述べられている。例えば、大江・川住（2014）は重度・重複障害児に対する教育的支援における実践研究の結果を踏まえ、重度・重複障害児のわずかな身体の動きを意思表示として受け止めながら、支援者や指導者が意味ある反応として捉え、フィードバックしながら、その働きかけの反復性や継続性の必要性や指導者が臨床像を的確に捉えた指導計画を立案し評価することの大切さを述べている。そして、岡澤（2012）は、先行の実践研究を基に、超重症児とのやりとりにおける支援者や指導者の省察の蓄積によって、超重症児のコミュニケーションにおける随意性や意図性の理解に近づくと述べている。さらに、濱田・菊池（2014）は、重度・重複障害児に対するコミュニケーションにおける働きかけは支援者や指導者の行動に留意していく必要があるとの結論を導いている。重度・重複障害児のコミュニケーションの獲得について、筆者（2022）は既に先行研究を元に検討をしたところである。

重度・重複障害児は運動器官や感覚器官に著しい制限や制約が生じていることが多く、自然な環境下で子ども自身の力のみでは学んでいくことが難しい場合が多い。しかし、支援者や指導者が丁寧な関わりを行うことで着実に成長していくことが以上の先行研究や実践からも明らかになっている。

重度・重複障害児にとって生命を維持するための健康管理だけでなく、他者とのやりとりや関わりなどのコミュニケーション活動が大切であることは言うまで

もない。

本研究では、日本特殊教育学会における重複障害児の教育研究について、鳥海（2019）を参考にし、2013年から2022年までの10年間の発表論文から、重度・重複障害児における支援や指導の実践の場において、特にコミュニケーションについてどのような研究がなされているかを明らかにし、今後の重度・重複障害児の教育への一助になるようにしていきたいと考えた。

II 目的

本研究では、日本特殊教育学会における重複障害児を対象とした発表論文から過去10年間の研究について調査し、重度・重複障害児のコミュニケーション支援・指導についてその動向を検討し、今後の重度・重複障害児のコミュニケーション発達支援のための支援者や指導者のための教育活動について考察することを目的とする。

III 研究方法

特別支援教育に関する研究において、特に教育的な内容の発表が多く、また、多くの教育関係者による実践的な発表が多いと考えられる日本特殊教育学会の2013年から2022年までの大会発表論文を分析する。重複障害児（者）を対象とした研究について、①「重複障害」がフリーワードに含まれている研究を選択した。さらに、②重度・重複障害児（者）であるもののみを対象とし、その他の研究は除外した。それぞれの項目に関する分類の分析過程においては、筆者と特別支援教育に携わる大学教員1名でその妥当性の検討を行った。

なお、重度・重複障害の基準は発表論文内の記述が「重度・重複」と明記されているものはもとより、発表論文の内容が重度・重複障害児（者）を対象としているものであれば対象に含めた。なお、重度・重複障害児（者）を対象に選択する根拠として、「大島の分類」の定義を活用した。

以下の6点について分析を行った。

- 1 全発表件数における重複障害児（者）を対象とした発表件数の割合
- 2 重度・重複障害児（者）を対象とした発表内容
- 3 重度・重複障害児（者）を対象とした研究方法
- 4 重度・重複障害児（者）を対象とした研究の対象の属性
- 5 重度・重複障害児（者）を対象としたコミュニケーションに関する発表件数とその詳細

- 6 重度・重複障害児（者）を対象とした特殊教育学会における研究論文

IV 結果

1 全発表件数における重複障害児（者）を対象とした発表件数の割合

表1に全発表件数に対する重複障害児（者）を対象とした発表件数及びその割合を示した。2021年はコロナ禍の影響で学会の規模が縮小されたこともあり、全発表件数も重複障害児（者）を対象とした発表件数も他の年度より大きく減少している。また、2019年及びその周辺年度において重複障害児（者）を対象とする研究発表数の割合が増加していた。しかし、筆者は重複障害児（者）を対象とした発表論文の中でさらに重度・重複障害児（者）を対象とした研究発表数を調査したところ、重複障害児（者）の研究発表数のうち例年、概ね8割が重度・重複障害児（者）が対象となっているが、2019年度はそれが64.5%であった。よって、重度・重複障害児（者）に限定した発表数は例年とほぼ変わらない数となった。また、2019年は例年より聴覚障害と他の障害を併せ有する児を対象とした内容の発表が多くあった。これは、2019年に、厚生労働省及び文部科学省が連携し検討を進めている、「難聴児の早期支援に向けた保健・医療・福祉・教育の連携プロジェクト」が立ち上がったことが影響しているのではないかと筆者は考えた。

2 重度・重複障害児（者）を対象とした発表内容

発表の内容については、「学校教育」、「家庭教育」、「療育・福祉・医療」、「その他」に分類した結果を図1に示した。「学校教育」は89.4%、「家庭教育」「療育・福祉・医療」は共に3.3%、「その他」は4.0%であり、10年間を通して「学校教育」に係る内容が圧倒的に多く、重度・重複障害児（者）の研究は学校現場におけるものが多く、ニーズも高いことが示唆された。

3 重度・重複障害児（者）を対象とした研究方法

研究方法として、「アンケート・インタビュー調査」「実験・観察」「文献レビュー」「指導・実践等」に分類した。「文献レビュー」には文献レビューの他、今までの先行研究をまとめた報告等も含まれている。「指導・実践」での研究発表が一番多いことが示唆された。

表1 全発表件数における重複障害児(者)を対象とした発表件数の割合

年度	全発表数	重複障害児(者)を対象とした発表数	全発表件数に対する重複障害児(者)を対象とした発表件数の割合
2013	596	22	3.7%
2014	578	13	2.2%
2015	645	21	3.3%
2016	553	20	3.6%
2017	622	27	4.3%
2018	648	26	4.0%
2019	626	31	5.0%
2020	477	18	3.8%
2021	311	3	1.0%
2022	407	13	3.2%

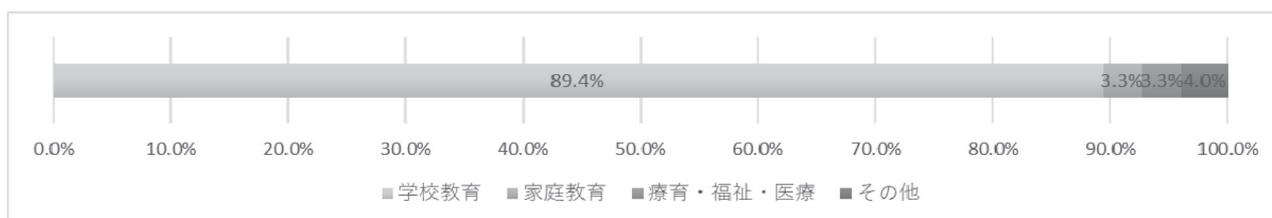


図1 重度・重複障害児を対象とした研究内容

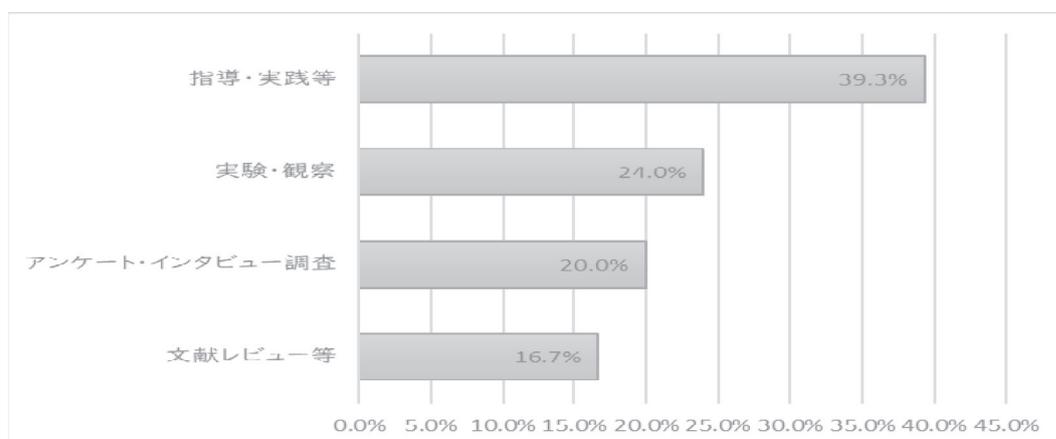


図2 重度・重複障害児を対象とした研究方法

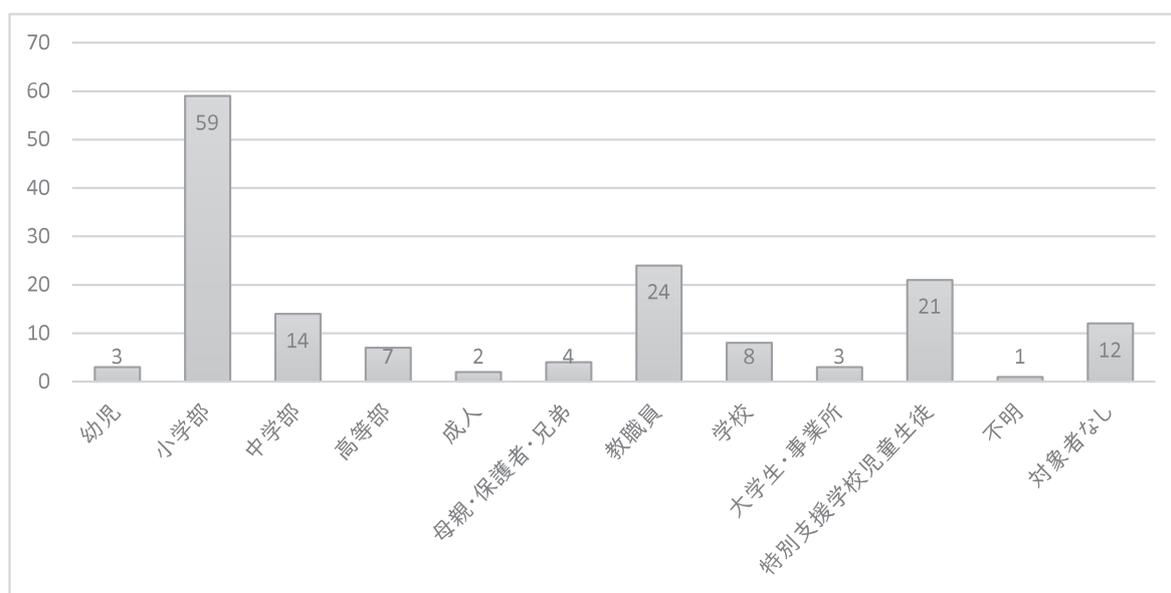


図3 重度・重複障害児（者）を対象とした研究対象の属性

4 重度・重複障害児（者）を対象とした研究の対象属性

研究発表における研究対象者については以下のとおりであるが、対象が複数名いる場合、対象の属性が複数に及ぶものもあった。その場合はそれぞれの対象に応じた属性に含めた。小学部の児童が対象となっていることが多かった。なお、ここでは、対象者の人数ではなく、1つの研究においてどの属性の者を対象としているかを検討したものである。また、属性の中の特別支援学校児童生徒はどの学部かが示されていないためそのままを記載した。

5 重度・重複障害児(者)を対象としたコミュニケーションに関する発表件数とその詳細

重度・重複障害児（者）を対象とした発表において、コミュニケーションややり取り、他者との共感やアイコンタクトに関することを主にした研究発表は28発表であった。これは全体の研究発表論文数の18.7%にあたる。そのうち学校教育に関するものが24件の発表、家庭教育に関するものが2件の発表、療育・福祉・医療に関するものが2件の発表であった。また、研究方法としては、観察・実験が13件の発表、指導・実践等も13件の発表、アンケート・インタビュー調査は2件の発表であった。アンケート・インタビュー発表の対象は両発表とも教師であったが、その他の発表の対象は小学部の児童が対象となっているものが19件の発表もあり、非常に多かった（複数回答を含む）。また、アンケート調査以外の研究の対象人数は1名が最も多く、次いで2名が3件の発表と少人数を対象としている

ものが多かった。また、アンケート・インタビュー調査以外は重度・重複障害児（者）と直接的な関わりについての発表であった。

6 重度・重複障害児（者）を対象とした特殊教育学会における研究論文について

発表論文に加え、同じ年代に特殊教育学会の「特殊教育学研究」に投稿された論文についても検討した。「特殊教育学研究」では原著論文、資料論文、実践研究論文、展望論文、研究時評論文の5つの論文の種類があるが、それらすべてを対象とした。2013年から2022年で重度・重複障害児を対象とした論文は13論文あり、療育・福祉・医療関係のものが2論文、11論文が学校教育に関するものであった。内容は様々であるが、研究方法は実験が多く、身体等の動きに関するものが多かった。コミュニケーションを研究の主目的にしたものは皆無であった。

V 考察

重度・重複障害児は、「Iはじめに」でも、そして、筆者が今までの研究でも述べたように、身体各部や感覚器官に著しい制限や制約を生じているため、自分自身で自分のもっている力を十分に発揮することが難しいが、繰り返し、丁寧な教育的支援や関わりを継続して行うことで少しずつ学び、発達していく。特に、重度・重複障害児にとって生命を維持するための健康管理だけでなく、他者との関わりであるコミュニケーション活動を行うことが大切であることは明白であ

る。重度・重複障害児のコミュニケーション活動は乳幼児期の初期発達の原理が活用できることも先行研究で明らかとなっている。また、重度・重複障害児にとって支援者や指導者の関わり方が重要である。重度・重複障害児にとって学びの場である学校での教育活動が「楽しい」「分かる」は重要な視点であり、適切な刺激量での活動を設定していく必要性も明らかとなっている。しかし、本研究で、重度・重複障害児（者）を対象としたコミュニケーションに関する発表論文は2割弱しか存在しなかった。しかも、研究論文は1つもなかった。

また、筆者（2021）は重度・重複障害児の生理心理学的指標の研究についても論じたが、今回の検討において、学校教育の中で行われている研究にはほとんど生理心理学的指標が活用されていないことが明らかとなった。つまり、生理心理学的指標が学校教育の中では重度・重複障害児の評価を行う際に活用するには適していないことが示唆されるのではないだろうか。また、多くの研究において対象となる重度・重複障害児（者）は1名～2名が最も多かった。これは、重度・重複障害児はそれぞれの実態が大きく異なるため一様の支援や関わりを提供することが難しく、重度・重複障害児には一人一人に適した支援や関わりが提供される必要性が示唆されたのではないかと考える。それは、支援者や指導者の働きかけが一層個別化される必要性を意味すると思われる。

多くの先行研究において重度・重複障害児のコミュニケーション活動の必要性が明確にされながらも、実際に教育現場では研究が進展していないのは、言語を活用しないコミュニケーション手段を取らざるを得ない重度・重複障害児において、そのコミュニケーション活動を評価していくことが難しい、また、支援者や指導者の働きかけが個別化される必要性があり、一様に判断することが困難であることも要因の一つに挙げられるのではないかと考えた。さらに、重度・重複障害児のコミュニケーション活動の評価については、支援者や指導者の経験や専門性の高さも必要になってくることも1つの要因になりうると考えられる。

重度・重複障害児がQOLを高め、より効果的な社会参加を行うためには他者とのコミュニケーションをどのように取っていくかは重要な課題の1つとなる。医療技術の進歩により重度・重複障害児が地域や家庭で生活できるようになり、多くの人と関わりながら生活をしている。自分の感情や意思を少しでも他者に伝えることができるようになれば、明らかに重度・重複障害児のQOLは高まり、社会参加の第1歩となるであろう。そのためにも個々の教育的ニーズに応じた学び

が提供できる学校教育において、重度・重複障害児のコミュニケーション力を高めるような関わりや教育的な支援は大切となる。重度・重複障害児に系統的、段階的な教育的支援を実践するには、まず重度・重複障害児のコミュニケーションの発達について研究がなされていく必要があると考えられる。また、インクルーシブ教育において重度・重複障害児が通常学校で学ぶ機会も増えてきたことを考えると重度・重複障害児とどのようにコミュニケーションをとっていくのか、どのような働きかけや関わりが重度・重複障害児の発達をより促すのかを考えていくことは重要な課題の1つと言えよう。

特別支援学校在籍児の障害の重度・重複化、インクルーシブ教育の推進等からも重度・重複障害児教育に関する研究、特にコミュニケーション活動における働きかけに対しては、今後の特別支援教育において重要な役割を有するものであり、更なる研究が望まれると思われる。

VI 文献

- ・遠藤信一；一重度・重複障害幼児の意思の表出を促す取組、特殊教育学研究、29（4）、21-25、1992
- ・濱田匠・菊池紀彦；かかわり手の行動分析に基づく重症心身障害児のコミュニケーションの特徴、三重大学教育学部研究紀要教育科学、65、215-222、2014
- ・細淵富夫；重度・重複障害児のコミュニケーション研究をめぐる諸問題—乳児研究からのアプローチ、障害者問題研究、23（4）、307-314、1996
- ・細淵富夫；特別支援教育に関する教育心理学的な研究動向と課題—重度・重複障害児の教育実践研究を中心に—、教育心理学年報、53、96-107、2014
- ・池田吏志；重度・重複障害児を対象とした関わりに関する教育研究の動向と課題、広島大学院教育学研究科紀要、64（1）、29-38、2015
- ・川住隆一；遷延性の重度意識障害を呈する超重症児の理解と支援、日本重症心身障害学会誌第43（1）、9-14、2018
- ・文部科学省；令和3年度 特別支援教育資料、2022
- ・岡澤慎一；超重症児への教育的対応に関する研究動向、特殊教育学研究、50（2）、205-214、2012
- ・大江啓賢・川住隆一；重症心身障害児及び重度・重複障害児に対する療育・教育的支援に関する研究動向と課題、山形大学紀要（教育科学）、16（1）、47-57、2014
- ・鳥海順子；重複障害教育に関する展望、教育実践学研究（山梨大学教育学部附属教育実践総合セン

- ター研究紀要)、24、2019
- ・山根康代；重症心身障害児及び重度・重複障害児の教育支援に関する現状と課題（その1）、畿央大学紀要18（2）、43-49、2021
 - ・山根康代；重症心身障害児及び重度・重複障害児の教育支援に関する現状と課題（その2）、畿央大学紀要19（1）、67-73、2022